



統計から社会の実情を読み取る

第50回 死後の世界を信じるか

本川 裕

Honkawa Yutaka

アルファ社会科学株主席研究員

■東京大学農業部農業経済学科卒。財団民経研究協会常務理事研究部長を経て、現職。立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、ネット上で「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著作は「物流コストと日本の産業競争力」(学術誌『国民経済』、2004年)、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年) 等。



死後の世界を信じるかについての国際比較と時系列変化

世界価値観調査によると、日本人のうち死後の世界についての見方として「存在する」、「存在しない」、「わからない」の割合は、2000年に、それぞれ、31.6%、30.5%、37.9%となっていた。

この結果を世界各国と比較すると図1の通りである。

死後の世界が存在していると信じている者の割合は、エジプトの100%からベトナムの14.6%まで、国ごとにかなり異なっている。エジプトや2位のインドネシア、3位のヨルダンなどイスラム圏諸国では死後の世界を信じる者が多く、ベトナムやロシア、エストニアなど旧共産圏諸国では死後の世界を信じる者が少なくなっている。先進国はその中間に位置しているが、先進国の中では米国では死後の世界を信じる者が多く、フランス、ドイツ、デンマークなどでは信じる者が少ない。日本人の「存在する」の割合は55か国中44位なので、どちらかというと余り信じない方だと言えよう。日本人の特徴は、「わからない」の割合

が最も多い点にある。日本人は、そもそも証明するのが困難な死後の世界に対して「存在する」あるいは「存在しない」と断定するのが嫌いか不得意であるようだ。

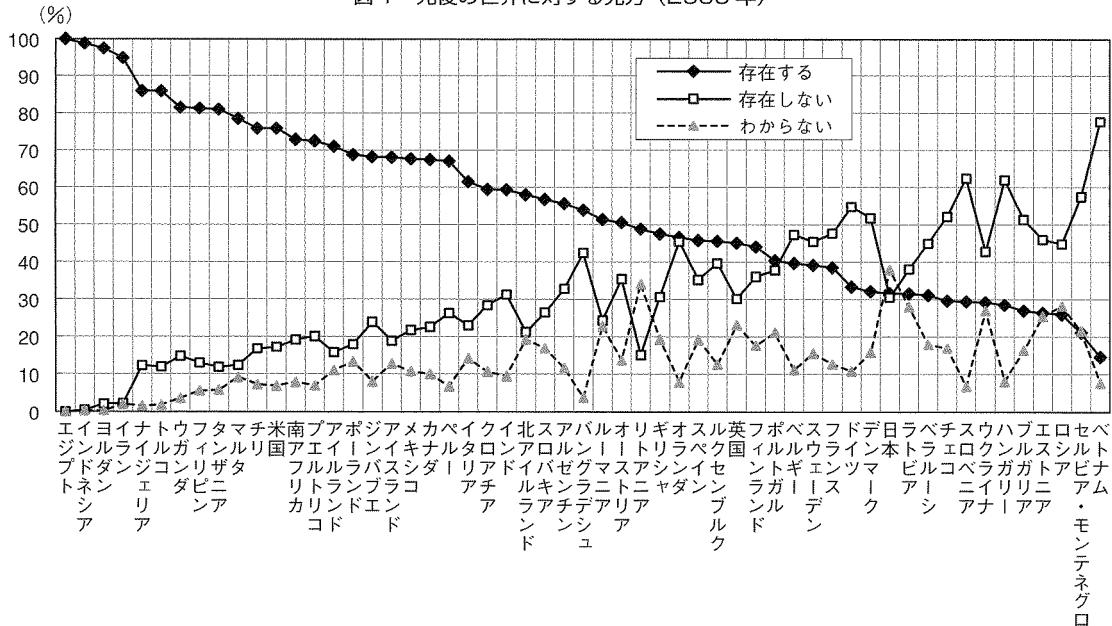
科学技術の発達とともに現代人はだんだんと死後の世界を信じなくなっているのであろうか。その点を確かめるために、死後の世界、あるいはあの世・来世を日本人が信じているかどうかについて長期的に継続実施されている意識調査の結果を図2に掲げた。

設問の仕方によって各調査でレベルの差はあるものの、長期的には、死後の世界を信じる者は減っているのではなく、むしろ、増加していることが分かる。

死後の世界を信じるかについての地域差

世界各地には様々な文化をもった人々がいる。日本国内は文化的な共通性が高いと信じられているが、世界各地における考え方は全く同じではない。そこで、世界各地と日本各地の考え方や文化の地域差を、死後の世界を信じる割合で調べて

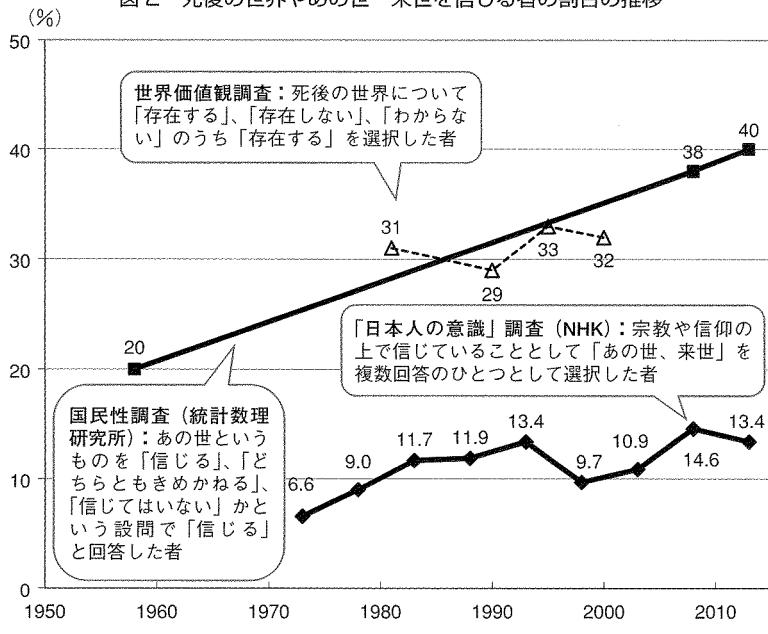
図1 死後の世界に対する見方（2000年）



注) 各国の18歳以上男女1,000サンプル程度の回収を基本とした共同意識調査である世界価値観調査（2000年）の結果。

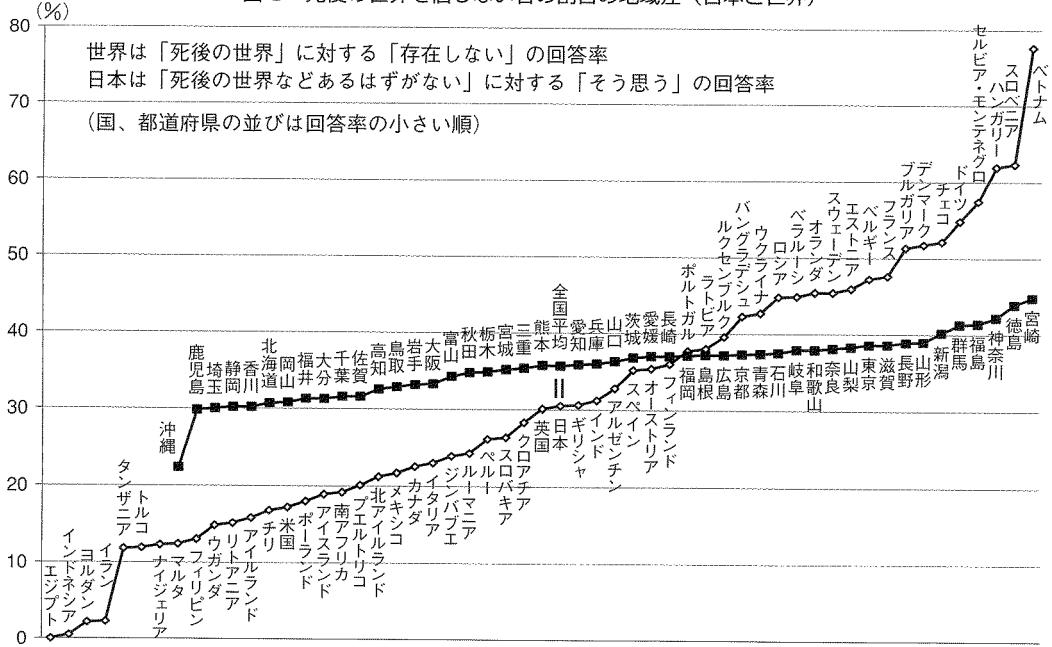
資料) 電通総研・日本リサーチセンター編『世界60カ国価値観データブック』

図2 死後の世界やあの世・来世を信じる者の割合の推移



注・資料) 図中の通り

図3 死後の世界を信じない者の割合の地域差（日本と世界）



注) 世界は、各国の全国 18 歳以上男女 1,000 サンプル程度の回収を基本とした 2000 年の意識調査結果である。

日本は、各県 16 歳以上 900 人を対象とした 1996 年の個人面接調査による（回答率全国平均 70%）。

資料) 電通総研・日本リサーチセンター編『世界 60カ国価値観データブック』

NHK 放送文化研究所『現代の県民気質—全国県民意識調査—』

みよう。

図3の通り、結果はだいたい想定の範囲内かも知れない。世界55か国で、「死後の世界」について「存在しない」と答えた人は、エジプトの0%からベトナムの77.6%まで幅広いが、日本の47都道府県については、「死後の世界などあるはずがない」と答えた人は、沖縄の22.3%から宮崎の44.8%まで22.5%ポイントの差に止まっている。沖縄は、信じない人が2番目に少ない鹿児島の29.8%とかなりの差があり、特異な地域となっている。沖縄を除くと日本各地の地域差はさらに15%ポイントに縮まる。沖縄を除くと、鹿児島が最低、隣の宮崎が最高となり、西日本対東日本といった地域差はないようだ。また、埼玉が下から3位、神奈川が上から3位ということから、大都市圏と地方圏との傾斜もないようである。

祖先の靈的な力を感じるか

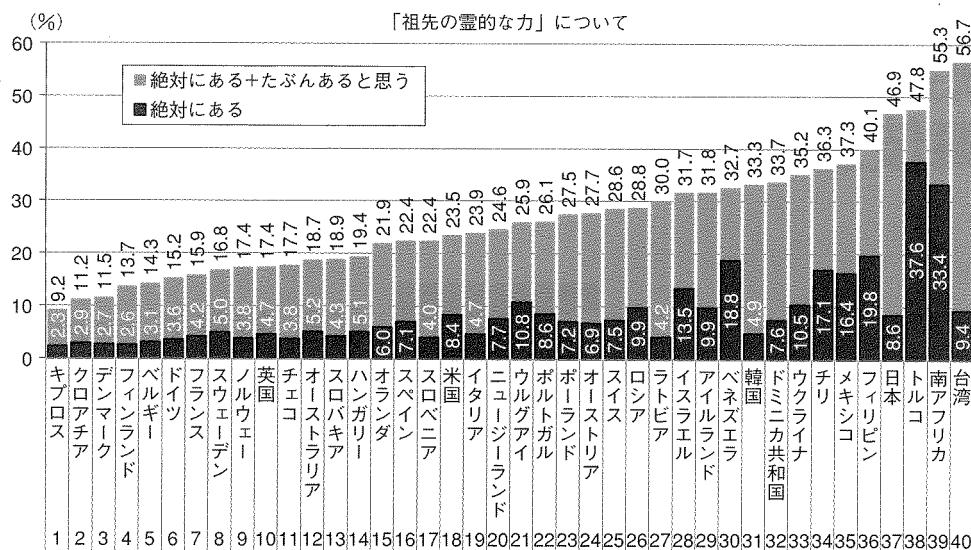
以上にふれたように、死後の世界の存在については、信じるというより不可知であるという感覚の強かった日本人であるが、実は、前近代的、あるいは、土俗的と見なされる信仰心をかなり保持していることを示すデータがあるので次に紹介しよう。

2008年のISSP調査の結果から、「祖先の靈的な力」があると思う人の比率の国際比較を図4に掲げた。

これを見ると、日本は、台湾、南アフリカ、トルコに続いて、「祖先の靈的な力」があると思っている人が多い。46.9%とほぼ半分の人がそう思っているのである。

大陸別に見ると、アジア、アフリカ、南米の国民はこうした靈力があると思っている者が多いが、西欧の国民は概してこうした靈力があると思

図4 祖先の靈的な力を感じるか（国際比較）



注) データは国際的な継続的共同調査である ISSP (International Social Science Programme) 2008 年調査（宗教についての国際比較調査、概ね 18 歳以上男女約 1,000 ~ 3,000 人が対象）による。「わからない・無回答」を含む総数に対する割合。

資料) ISSP (<http://www.issp.org/index.php>)

う者は少なくなっている。文明化される以前から人間が抱いていた素朴な宗教心が日本人には強いことを示していると考えられよう。

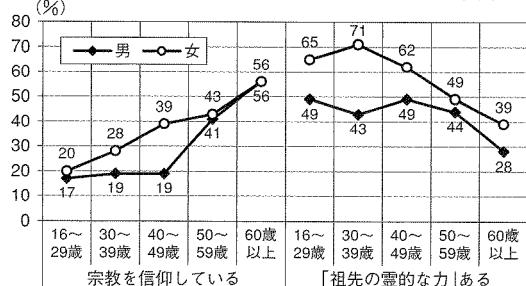
ISSP 調査は、各国の調査研究機関が同じ調査票を使い国際的に協力して行っている共同調査であるが、日本の担当機関は、NHK の世論調査を実施している NHK 放送文化研究所である。2008 年調査結果についてこの研究所による紹介記事から、一般的な信仰心と祖先の靈的な力があると思っているかという宗教心の 2 側面について、男女別・年齢別に整理したデータを図 5 に掲げた。

これを見ると興味深いことに、キリスト教や仏教などの宗教を信じているという一般的な信仰心は高齢者の方が多く抱いているのに対して、祖先の靈への素朴な宗教心は若者の方が多く抱いていることが分かる。なお、男女別には、いずれの宗教心も女性の方が男性より多く抱いている。

素朴な宗教心である「祖先の靈的な力」があると思っている人は、高齢者では 3 ~ 4 割であるのに対して、30 代の女性はおよそ 7 割を占めて

図5 日本人の宗教心

～一般的な信仰心と祖先靈力信仰の世代別分化～



注) ISSP2008 による。

資料) NHK 放送文化研究所『放送研究と調査』2009 年 5 月号

いる。他方、一般的な信仰心では、30 代の男女は 60 歳以上の男女の半分かそれ以下しか信仰をもっていない。両者は極めて対照的なパターンとなっている。少なくとも宗教心に関しては、高齢者は西歐的であり、若年層は非西歐的なのである。

* 「社会実情データ図録」関連図録

[1] 図録 9520「神の存在・死後の世界に対する見方(世界 55 カ国比較)」

[2] 図録 9530「祖先の靈的な力を感じるか(国際比較)」